



栗原紀夫先生を偲んで

五十棲 泰人

先生が去る12月19日に逝去された。まだ81歳というお年だった。農薬化学の分野で研究を始められ輝かしい業績を上げられると同時に、京都大学放射性同位元素総合センターに奉職以来全学及び全国の放射線安全管理の向上に精魂込めて尽力された。本来の研究と奉仕的な安全管理の仕事を両立させて活躍される先生の後姿を尊敬の念を持って追いかけた。まだまだご助言、ご指導をいただける存在だと思っていた。その先生の訃報に接し、たとうようもなく寂しい。

栗原先生に初めてお会いしたのは、昭和46年京都大学に新設された放射性同位元素総合センターの助教授に就任された直後のことである。それまでは、ゴキブリを使う農薬の先生ということぐらいしか知らなかった。放射性同位元素とゴキブリとどんな関係があるのだろうと思っていた。当時、私は清水栄先生（京都大学名誉教授）の大学院生として化学研究所付属放射性同位元素総合研究室（現 分館研究棟）で原子核物理の実験を行っていた。就任早々の先生は、センター建物新築計画（現 本館研究棟）の打合せのために、初代センター長である清水先生の室に足繁く通われていた。そのうち同じ総合研究室内で活動を始められ、Ci単位のトリチウム水を使う化学合成を、慎重、安全、確実にこなされるのを間近に見る機会を得た。放

射性同位元素に不慣れで自信の持てなかった私には、正に安全取扱の手本を見る思いがした。

昭和48年、私はセンターの助手に採用された。その後、平成2年に化学研究所に移るまでの17年間、栗原先生の下で実験研究と放射線安全管理の2足の草鞋を履いて働いた。最初の仕事は、分館研究棟改装工事のための変更承認申請書の作成であった。法令に基づく書類を作成するという経験のない仕事に出会って本当に困惑した。本館研究棟の新築の際に申請書を作成したのは栗原先生だった。センター設立事業に忙殺される中で作成された手書きの申請書を初めて見て、先生のご苦勞を肌で感じた。私は奮闘したのにも関わらず、完成までに1年近く掛かったのを覚えている。その間、先生は辛抱強く待ち、相談に行くたびに丁寧な助言をいただいた。私にとっては、申請書作成は放射線安全管理の基本を理解するきっかけになり、その後の関連する仕事を行うための大きな力となった。

栗原先生は学内施設で生じる安全管理上の諸問題に大学としての確に対応できるよう、センターを中核に置く体制作りの構築に尽力された。また、放射線教育の必要性を説かれ、早い時期（昭和50年頃）に、京都市消防局職員を対象とする講習会を始められた。それは今も小学生から高校生までの若い人たち及び放射線の知識を必要とする一般社会の人たちに対する各種放射線学校として続いている。平成8年、京都大学を退職される。私は先生の薦めもあって後任の教授に採用された。直後の大学法人化改革の嵐が吹き荒れる折、当センターが大過なく対応できたのは、現役時代に苦勞して築かれた安全管理体制ほか数々の先生のご貢献によるところが多い。法人化改革の難しい場面ではいつも先生が横に付いていてくれるという気がした。ここに、改めて感謝の意を表し筆を置くことにします。

（京都大学名誉教授）